

Title	地域沿岸域管理による価値創出 : 合意形成は何を生み出すか
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	第5回日本沿岸域学会講習会 : 沿岸域における合意形成: 2-3
Issue Date	2005-04
Type	Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16818
Rights	本著作物は日本沿岸域学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japanese Association for Coastal Zone Studies. Copyright (C) 2005 日本沿岸域学会. 敷田麻実, 第5回日本沿岸域学会講習会 : 沿岸域における合意形成, 2005, pp.2-3.
Description	「沿岸域における合意形成」 沿岸域の合意形成の方法論とその適用方法に関する講習会, 日時: 平成17年4月22日(金)13時~18時, 場所: (財)日本システム開発研究所 5階会議室

地域沿岸域管理による価値創出～合意形成は何を生み出すか～

金沢工業大学情報フロンティア学部

教授 敷田 麻実

1. はじめに

沿岸域管理は「沿岸域の環境や資源を好ましい状態で維持し、利用者の価値を実現するために、沿岸域環境に影響を与える人間の利用を調整する考え方とその仕組み、そしてその実践」だと言われている。今日では多元化した沿岸域利用を背景に、多様な利用者が沿岸域の価値を享受できるような仕組みが求められ、「沿岸域管理」に期待が集まっている。しかし、実際の沿岸域管理の現場の課題は、関係者が具体的なルールや制度などをいかにして生み出せるかであろう。そこで本講義では、沿岸域管理を進める際に必要な仕組みをどのように創り出すかについて、特に地域の沿岸域管理という観点で解説する。

地域沿岸域管理の背景

地方分権と海岸法などの沿岸域に関する主要な法律が改正されたことを背景に、地域の沿岸域を主体的に管理する試みが日本各地で始まっている。それは海岸やクロマツ林、サンゴ礁などの保全活動と深く関わるが、これまでのように国や県の管理に協力するだけの関係を越えて、関係者が主体的に参加していることに特徴がある。またその際に、地域内だけではなく、地域内外の多様な関係者が、地域の沿岸域をより良くしようと協働することも試みられ、関係者による沿岸域との「かかわり」や管理への「参加」を理想としている。

このような「地域沿岸域管理」の試みは、日本沿岸域学会の2000年アピールでも必要性が指摘されているが、多数の参加による調整システムの混乱や、不特定多数の外部者による秩序の低下を懸念することが多かった。そこで、沿岸域利用が多元化し、ニーズや実現したい価値が多様化した現在、住民・管理者(監督官庁)・地域内外からの利用者など、多様な関係者が参加した「地域沿岸域の秩序ある管理」を考えることは重要である。

一方、現在の多様な沿岸域利用者は、レクリエーション機会や景観保全など、沿岸域でのさまざまな価値の実現を求めている。そのため、沿岸域の持つサービスを限定し、単純にその享受度合いを「調整」しようとしても競合は解決しない。また、今までの「沿岸域の利用調整」に見られる議論では、こうした価値創造について議論せず、その目的を「競合の解決」や「利用調整」また単純に「合意形成」に求めるものが多かった。しかし重要なのは、既存の価値の配分ではなく、さまざまな関係者が新たな価値を協働して生み出す「価値創造的な管理」である。

2. 価値創造のための仕組みの提案

それではどのようにして創造的な管理を創り出したらいいのだろうか。そのカギは「参加」と「自律性」にある。まず参加とは、多様な関係者の持つ知恵や知識を管理に活かすためのシステムに主体的に参加することを指す。次に自律性とは、地域の沿岸域を管理するルールや制度(つまり沿岸域管理システム)を、自らアダプティブに創出できることである。そして現在は、沿岸域環境の持続可能な利用を前提にした上で、利用者の価値実現を主体的参加と自律性で確保するという「二兎を追う」沿岸域管理が求められている。一見これは困難な要求に思えるが、価値を実現させるための「多様な知識を持つ関係者が参加する管理」で実現できる。そこに至る道筋を図1に示す。

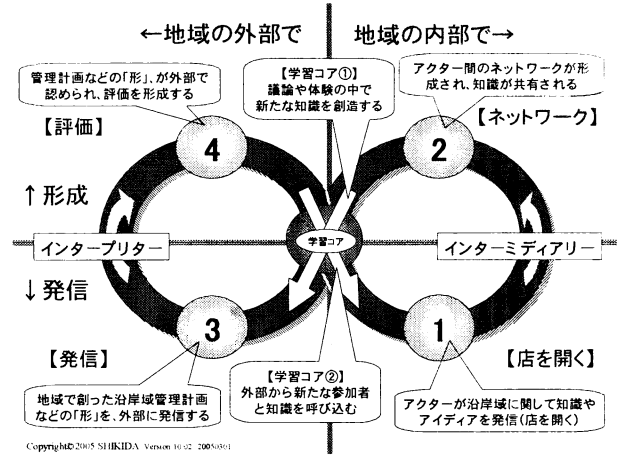
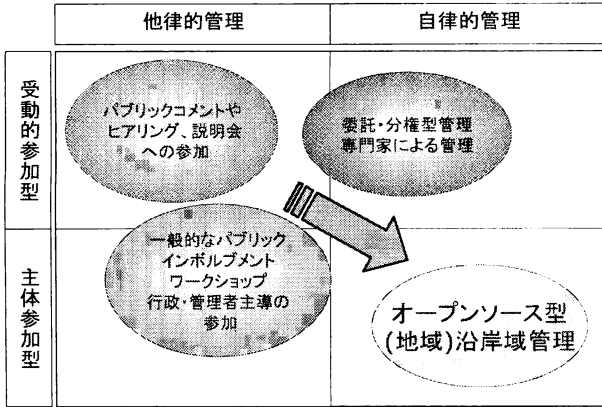


図1 沿岸域管理への参加スタイルと自律性の関係 図2 オープンソースによる沿岸域管理のサーキットモデル

この図では、行政が仕組みを決定して(「他律的管理」)、他の関係者を参加させる(「受動的参加型」)から、関係者が積極的に参加して(「主体的参加型」)、アダプティブに仕組みを形成する(「自律的管理」)まで、参加のスタイルと自律性で管理のタイプを整理した。参加者が既存の管理に参加させてもらう受動的参加では望む価値は実現しない、また外部に管理システムを依存する他律的管理では状況の変化にアダプティブに対応することはできない。最終的には、関係者の主体的参加で、ルールや制度を含む管理システム(=知識資産)を創出する「主体的参加による自律的管理」を実現したい。それはオープンソースと呼ばれる手法に近い。「オープンソース」とは、Linuxなどで使われているソフトウェア開発手法で、参加者にルールやプロセスが公開され、「創る側」に自由に参加できる手法である。

ではそのようなオープンソース型の管理をどのように創出すればいいのだろうか。

その創出プロセスは、サーキットモデルで表すことができる(図2)。多様な関係者が沿岸域管理に関するさまざまな知識を持ち寄り、それを共有した上で、沿岸域管理のルールや制度、沿岸域管理計画などの新たな知識資産を創り出す。そのことで評価されると新たな知識を持った新たな関係者を招き入れることができる。このような連続的なプロセスを沿岸域で創出し、沿岸域の価値と持てる知識資産をスパイラルアップさせることが必要である。

3. おしまいに

これまでのように特定の管理者にすべての「管理」を委ねることは得策ではない。万能の管理者によるスタティックな管理というのは、環境や社会状況がきわめて安定した場合にしか実現しない「特殊解」である。そこで、これまでとは異なる、連続した最適解の提案ができる「アダプティブな管理」が必要である。そのためには、関係者が主体的に参加する自律的な管理、オープンソース型の沿岸域管理が望ましい。今まで専門家や技術者が独占していた管理を、多くの関係者(ほとんどは利用者)にも開放することになるが、それはより多様な知識を沿岸域管理システムに持ち込むことだと評価したい。

そして、合意形成を決められたパイの配分だと捉えるのではなく、新たなルールや制度、管理計画などの「知識資産」を創り出す創造的なプロセスだと考えれば、沿岸域の管理はよりダイナミックになろう。その中で価値が生み出されるようになれば、多くの国民の目も沿岸域に向き、その本来的な価値の維持にも支援が得られるに違いない。